■音 と 訓

漢字の学習と言へば、直に思ひ浮かぶ言葉は“音･訓”である。この言葉が見える最初の文献が、先の『古事記』の序文である。

「すでに“訓”によりて述べたるは、詞(ことば)、心におよばず」とあって、先の「全く“音”をもちて……」に連なってゐる。

“訓”の音はクンであるが、この頃には、日本語に“ン”といふ発音はまだ存在しなかった。それで、クンと言へず、クニと発音してゐたはずである。(京都府に乙訓(おとくに)郡といふ名前がある。この名前もこの頃付けられたものである)

それで、“国”の意味の和語である“くに”を“訓”といふ字で表した。これも“仮借”の一種である。“訓(くに)”だと、“久爾(くに)”といふ二字が一字で書き表せるので、“久爾”の代りに“訓”が用ひられたのである。

漢字が我が国に渡来して、百年や二百年の間は、「和我夜度……」といふやうに「全く“音”をもちて」書き連ねたものと思ふ。しかし、和語(やまとことば)の“はな”は漢字(漢語)の“花”に当ることが解ると、“波奈”の代りに、“花”と書くやうになった。

“花”の音はクヮであるが、これを日本語として“はな”と読むので、この読み方を、“国(くに)読み”と言ったものと私は思ふ。それを“訓読”と書き、“クニヨミ”と読んでゐたのが、省略されて“訓”と書き表されたものであらう。

では、なぜ“くに”を表す漢字が解ってゐたはずの安萬侶の時代に“訓”といふ仮借を使ってゐたかといふと、「訓によりて述べたるは、詞、心におよばず」と考へてゐたからだと思ふ。

「詞、心におよばず」とは、「漢字は、日本語の心を十分には表し切れない」といふ事である。つまり、“くに”を表す漢字には、“国”もあれば“邦”もあり“邑”もある。しかし、沢山あっても、“くに”にぴったりの字はない。これが「詞、心に及ばず」といふ事で、その場合にはむしろ“仮借”の方がよいのである。

仏典でも、「色即是空(シキソクゼークウ)」(色は即ちこれ空なり)とか「色不異空(シキフーイークー)」(色は空に異らず)とか、インドのサンスクリットを漢字に翻訳してゐるが、“般若(ハンニャ)”とか“摩詞(マカ)”のやうに“仮借”してゐる言葉もある。それは「詞、心におよばず」と考へたからである。